

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです
他人を絶対に批判、否定してはダメだよ。人間は認められ、褒められることで成長するんだ。
世の中には、自分の知らないこと、見ていても観ていないことが、驚くほど満ち溢れています。
人間は自分の常識や体験が崩されることに、脅えをもちます。それがあたかも、自分を全否定されたように錯覚してしまうからです。「佐藤君、ありがとう！とても参考になったよ。よく気づいたね」
どんな情報を船井先生に伝えても、必ずそう礼を言われました。後になって、とっくに先生に届いている情報であったと知るので。「そんなことは知ってる！」多くのトップは、そう言うでしょう。絶対に先生は、その言葉を口にしませんでした。「君の見方がとても参考になったのだよ。僕が考えていたのとは、まったく違った視点で見ていたのでね。本当に参考になったよ」
会長、ご存じだったのですね、と言うと、またそう返されます。思わず顔は、にやけてしまうのです。
剣豪、宮本武蔵は、「見るべからず、観るべし」と書きしるしました。「観の目つよく、見の目よわく」とも書いています。真剣勝負の場において、相手の表面的挙動に迷わされては、生命を失うこともあります。相手の眼をみて、心のなかを観なければいけません。
人間は、外観にとらわれて、その本質まで知ろうとする人は稀です。時流のなかで突出した現象に惑い、その現象が未来永劫続くように錯覚します。観る時代だと、思うのです。表面にとらわれることなく本質を観る時代なのです。アメリカ極集中といわれてきた国際情勢、中国が経済的最強者になるのだという論評、お金があれば夢でも買えるという風潮。果たして本質はどこにあるのか？外観ではわからないことでも、内なる本質を観ればわかることも多いのです。
そんなときに、多角的に情報や観方を知ることは、とても大事です。一人の人間の観方では、知る領域も限られます。それはある意味、危険なことです。「認めてほめてあげなさいよ。その人間は必ず成長する。どんな考え方も聞いてあげなさい。そして、ほめるんだよ。すると、また成長した考え方を教えてくれる」
世の中にある事象、人間すべてが師だ、そんな視線が船井先生にはあるのです。ですから、いっそう幅広いさまざまな視線からの情報や考え方が集まりました。感謝の量が、情報の量になるのだと教えられます。情報は移動距離の二乗に比例します。旅の量が、情報量を決めるのです。それは、多くの人間の思索の旅路を、教えられること、つまり再体験することも同じだと思えます。観る眼は、あらゆる情報で鍛えられるのです。誰かを否定し、批判すると、情報のパイプ、何より多元的な価値判断を知るチャンスが失われます。
「人間は、ほめられることで成長しますが、ほめることでも成長するのですね」そう尋ねたとき、船井先生は、うんそうだよ、と歩きながらうれしそうに答えてくれました。「認めようとする、その人間の本質が観えてくるんだ。どうしてこの意見が出てきたのか、それをじっくり考えると自分では気づかなかった考え方が見えてくる」
そして、認めてあげることで、必ずまた新しい考え方がものの見方を伝えてくれる。「認めてあげる、ほめてあげる人のところには、多くの人が集うよ。否定したり、表面的なことで批判する人からは去っていくね」
観る眼を養う。そのために一番大切なことは、認めて肯定し、教えられたことすべてに向き合う姿勢にあるのです。

剣豪、宮本武蔵は、何と書きしるしましたか

()

船井先生は、うんそうだよ、と歩きながらうれしそうに何と答えてくれましたか？

()